

庫は交流運動の事務局としての役割を果たした。また、この運動の発端を作った画家渡辺晨畝は終始一貫して日中両国の連絡役をつとめた。かくて昭和四年三、四月の国民政府教育部主催第一回美術展覧会には中国側の要請に応じて洋画を出品することになり、正木を長とする委員会（事務所は本校文庫内）が設けられ、各団体から集められた八十数点の作品が中国に送られ、梅原龍三郎その他が委員として上海へ赴いた。次いで同年十一月にはやはり上海で日華聯合絵画展覧会が開かれ、このときも正木が日本側の代表として各団体からの出品（日本画）をとりまとめ、北浦がそれらを携えて同地に赴き、晨畝とともに準備にあたった。この展覧会は引き続き大連でも開かれた。翌五年はこうした展覧会は開かれなかったが、その代わりに唐宋元明名画展のような古画の展覧会を再び開催しようという計画が持ち上がり、準備が進められた。

昭和六年一月から二月にかけて正木が三度目の渡支を試みたのは右の計画について中国政府の協力を求めるためで、息子の正木篤三と渡辺晨畝が同行し、中国では本校卒業生汪亜塵が案内をつとめ、上海、杭州、蘇州、南京へと要人を尋ね、その傍ら史跡や古美術を見学して回った。途中、各地で画家や学者、本校卒業生たちの大歓迎を受けた。同年四、五月、展覧会は日華古今絵画展覧会と銘打って東京府美術館で開催され、次いで大阪の貿易館でも開催された。また、帝室博物館でもこれと同時に国宝絵画特別展覧会が開かれ、王一亭をはじめ多数の中国人が来日した。今回出陳された古画は元、明、清の名画で、旧清内府や張学良の所蔵品、上海の龐萊臣所蔵の虚齋名画録二十巻などが特に人目を引いた。しかし、この年の

九月には満州事変が起こり、日中間の政治情勢が悪化して行つたため、次第に日中美術交流運動が存続し得ない情況に陥った。

② 校友会月報第三十巻記念号

昭和六年四月、『東京美術学校校友会月報』第三十巻第一号が三十巻記念号として発行された。明治三十五年六月創刊以来三十年間、断絶することなく発行されてここに至ったわけだが、編集部はこれを記念して結城素明の「入学当時以来の回顧談」と初期の卒業生たちによる「本校創立当時回顧座談会」の筆記録および高屋肖哲の「座談会の後に」を掲載した。それらは草創期の本校を知るための良い資料である。

③ 浄瑠璃寺吉祥天像の摸刻

浄瑠璃寺の吉祥天像とその厨子はともに建暦二年（一一二二）に造られた。厨子の扉絵と壁板絵は東京美術学校開校以前にその所有に帰し、現在本学芸術資料館所蔵となっている。なお、かつて岡倉天心はこれを「孝謙帝の初期に属すべきもの」であり、「天平美術衰兆を来せる時の画」であると推定した（『日本美術史』『岡倉天心全集』第四巻、昭和五十五年、平凡社）。

昭和六年一月、彫刻科木彫部助教関野聖雲は右の吉祥天像の復元摸刻（本学芸術資料館所蔵）を完成させた。『東京美術学校校友会月報』第三十巻第一号には彼の摸刻報告書が掲載されており、それによると、明治時代に本像摸刻の必要性が叫ばれたことがあり、大正十三年頃には高村光雲がそのために奔走したが実現せず、昭和